

全国高校総体 サッカー競技 神戸で開催

いよいよ昭和63年度全国高校総合体育大会が7月31日、ユーバーシアード記念競技場での総合開会式を皮切りに兵庫県で開催される。

サッカー競技は神戸中央球技場を主会場に、王子競技場、しあわせの村多目的運動場、同芝生広場、磯上公園、北須磨高校の6会場で、全国から55校の各都道府県代表が参加して開催される。

兵庫県代表は6月上旬に行われた兵庫県高校総体で優勝した御影工高と準優勝の八代学院高の2校が出場する。

全国各地の代表校としては、昨年優勝の市立船橋(千葉)準優勝の国見(長崎)や関東大会優勝の武南(埼玉)などの強豪も出場を決めている。

近畿勢では、京都の山城、大阪の北陽、阿武野などが出場権を獲得している。

サッカー競技の日程は別表の通りですが、準々決勝と準決勝の間に一日の休みがあります。これは夏の過酷な条件の中での連戦なので少しでも選手の体調を良い状態に保てるよう配慮したことです。

兵庫県代表としては、昨年、滝川第二が北海道大会で準決勝に進出し、三位に入賞しているだけに、今年もぜひ上位進出を果したい。

御影工監督 一北四郎

△競技会場 A 神戸市中央球技場 8:1~7日
B 王子競技場 8:1~4日、C しあわせの村運動場 8:1~3日、D しあわせの村芝生広場 8:1、2日、E 磯上公園 8:1、2日、F 北須磨高校 8:1、2日。



△試合開始予定時間
第1試合 10:00
第2試合 11:40
第3試合 13:20
第4試合 15:00
決勝戦 10:30

近畿高校大会 水口市で開催

昭和63年度神戸市少年サッカー指導者講習会初級コースは6月18日から7月10日まで、8回にわたる講義と実技で行われた。心配された雨は6月24日に降ったが、その夜は講義が予定されていたので実技への影響は全くなく、日程どおりに進行した。

7月7日には救急法の講義があり、指導上最も気にかかる足の打撲、ねんざには、冷して、圧迫して、高くする。水はがぶのみをしない程度にのせる等、詳しい説明を受けた。実技では毎回後半にゲームを取り入れてゲームをねらったが、得点の楽しさ、むつかしさを身をもって経験した。

新しい練習法を修得し、忘れていた課目を補足して少年達の要求に応えることは初めての方はもとより、再、再々受講の指導者にも求められる。走れる人は誰でも参加できる。

昭和63年度神戸市少年指導者初級コース

6/18王子19~21 開講式 講義 加藤 寛
6/21磯上19~21 講義 6/24磯上19~21 講義
6/27磯上19~21 実技 7/1磯上19~21 講、技、
7/5磯上19~21 実技 7/7磯上19~21 講、技、
7/10御影15~ 紅白戦 17:30~19:30
参加者名簿 飯島伸朗、石橋泰亞、稻岡恒幸、
井上良子、上野政俊、遠藤繁光

神戸市内高校リーグ

63年度神戸市内高校リーグ(神戸市総体)は7、8月に行われるが、1部A B、2部A B、3部A B C Dの各ブロックが別表のよう

に決まった。

63年度神戸市内高校リーグ組み分け

1部A 御影工 御影 六甲 育英 須磨東	1部B 神戸弘陵 八代学院 滝川第二 北須磨 長田	2部A 神戸朝鮮 兵庫合 伊川谷 須磨	2部B 赤塚山 神戸 神戸甲北 神戸高塚 鈴蘭台西	3部A 舞子 神戸西 伊川谷 神港学園 市神戸工	3部B 市神港 兵庫商 東灘 村野工 神戸高専	3部C 市神港 兵庫商 東灘 村野工 神戸高専	3部D 友が丘 兵庫工 星陵 夢野台
-------------------------------------	--	---------------------------------	--	---	--	--	--------------------------------

充実のモルテン Tango



株式会社 モルテン
広島/東京/大阪/名古屋/福岡/札幌

天に天国あり 地にフットボールあり

(13)

上野 勝幸

それにしても「マルセイユ」のアラン・ジレスのプレーは実に小気味よい。自転車競技と兼用できるよう、前列の席が取り外し式になつていてペロドローム・スタジアムに、観衆の心の彈む音が鳴る。小さな渦を巻くようにボールをさばくジレスに、「プレスト」の選手はついていけない。ポイントの高いスパイクをはいて、やつと163cmといわれる小柄な体から放たれたショットが、ゴールをわずかにそれていた。この場合、プレストのゴールキックだ。ゴールキックについては、規則の第16条に規定されている。ボールがタッチラインを割れば、第15条のスローインでプレーが再開。

ドリブルで一気にあがろうとしたジレスが、後ろから足を引っかけられた。第12条で規定するところの「不正行為」にあたる。

「認識ある過失」の違反に対しては、相手チームには有利な条件すなわちフリーキックが与えられるだけで、反則を犯した選手を直接制裁することはない。ところが「故意」が働いた、著しく不正なプレーの場合は、当該選手から「プレーする自由」を奪う(退場)ことがある。

審判員の任務をかたく定義すると「選手の安全を確保し、試合の円滑な進行をコントロールしつつ、事案の真相を明らかにし、規則を適正かつきわめて迅速に適用・実現する」ということにならう。刑事裁判なら、犯罪の発覚・捜査・公判・裁判の執行、の過程をとるが、フットボールにおいては、違反行為の「確認」と「裁定」との時間的距離は極めて短い。

両チームが入り乱れて攻撃と防衛を繰り返す、いわゆる「攻守一体型」のフットボールでは、接触プレーはつきものだ。例え、相手側に故意がなくても、被害



を受けた選手がカッとなることもあろう。勝利を目的としている以上、選手の心理には「違反への傾き」が生じている。

しかし、それにもかかわらず、スポーツのゲームとして成り立っているのは、アナーキズムが「人間性のうちに道徳的原理が本能として必然的に潜む」とする「性善説」によって支えられているからだろうか。82年スペイン・ワールドカップの対ブラジル戦で、マラドーナはパルバースに報復プレーを働いて退場を食らった。

世界最古の成文法典として名高いハムラビ法典にも「同害報復」が出てくるから、これはマラドーナ一人に限らず、人間の本性の一つかもしれない。今日、プロレスが根強い人気を誇っているのは「やられたら、やり返す」報復が魅力になっていると見ることができる。

しかし、フットボールでは報復行為を非常に嫌う。だから、純情無垢(一むく)な男としては、日米貿易摩擦問題で「報復法案」の言葉を聞くだけで、正直いつドキッとする。

そのマラドーナが86年メキシコ大会では、刹那(せつな)主義を脱ぎ捨てた。ラフ・プレーに対しても、冷静さを失うことはなかつた。「フェア・プレーの精神」から大きく外れた行為をとることはないだろうとの安心感を抱くからこそ、グラウンドに整列し試合に臨むことができるのだ。

両チームが入り乱れて攻撃と防衛を繰り返す、いわゆる「攻守一体型」のフットボールでは、接触プレーはつきものだ。例え、相手側に故意がなくとも、被害

(うえのかつゆき 写真)

参考文献

『法』を考える(ひとは羊か狼か) NHK市民大学講座、長尾龍一著、1986年4~6月期

この連載は西ドイツ、スイス、オランダ、フランス、イタリア5か国のフットボール事情を見聞した内容をお送りしているものです。

モンブラン発。愛するサッカーチームへ。

SOCER SHOES



TRAINING SHOES



TRAINING SHOES

